通園施設の療育支援による親の変化
ー親の育てなおしの視点からー

今西　良輔

札幌市児童福祉総合センター

キーワード
障害児，母親，支援，通園施設

１．はじめに

近年，発達障害という言葉が多く聞かれるようになっている．人の発達は，乳幼児期から身体的にも精神的にも大きな発達をとげ，様々なことを吸収していく．しかし，発達障害という特性によって，生活の中で自尊心や自己評価の低下が起きてしまうと日常生活を通して発達へ良くない影響を及ぼしかねない．そのため，可能な限り発達障害を早期に発見し，適切な理解と対応を取ることが重要となる．これからの発達障害児の早期支援は，従来は障害の程度を軽減するために子どもに必要な訓練を与えることが主な目標であったが，発達障害については日常の家庭生活や保育・教育の場への専門的な介入が必要となってきた．障害のある子どもに対する親の役割として，下田(2006)は，「まず初めの段階において，子どもに一番近い存在である親がどれだけ子どもの特性や障害を受け入れ，子どもを正しく理解し養育していくことが重要である」と述べている．コミュニケーションが取りにくい障害のある子と母親について，「母子間のコミュニケーションのつまずきが『育てにくさ感』につながっている」（根来ら2004）という指摘もある．療育を経験することにより，子どもに関する知識や養育方法を知ることで，様々な理解が促され，親としての変化が起きているだろう．そこから親は，子どもに対する適切な関わり方やその子に合ったコミュニケーションという経験を積み上げている．

発達障害児への支援は，障害があっても生活しやすくなるため，親子の関係を円滑にするためにも早期から取り組むことが重要とされている．一般の育児よりも障害児を育てる親は，一層の努力，負担，苦労が強いられるが，近年，核家族化や人口の流動化並びに家族相互の交流の不活発化や孤立化が起こっており，母親の育児不安を高める結果を招いてきている（岩田1996；牧野1981）．現代の核家族化に伴い，出産年齢の低年齢化によって親となる前に子育てをするようになることや，自分の親に子育てを教わる機会が乏しくなってきている．障害のある子どもを育てるということは，それ以上に未知のことであろう．筆者は，療育機関に通うことによって，障害のある子どもへの関わり方を療育機関で獲得することを通して，親とは何かを改めて獲得する経験をしているのではないだろうかと考える．

＜連絡先＞
今西　良輔
〒060-0007　北海道札幌市中央区北７条西26丁目
札幌市児童福祉総合センター
TEL：011-622-8630
E-mail：ryosuke.imanishi@fel.city.sapporo.jp

２．研究目的

本研究では，知的障害児通園施設（以下，Ｙ施設）における障害児療育と親支援を受けた母親が感じることやその想いから，Ｙ施設での障害のある子どもの親の変化を明らかにする．Ｙ施設で支援を受けている母親の変化について，筆者は「親の育て直し」という視点から，親に起きていることを検討することを目的とする．

３．研究方法

①研究協力者

研究協力者は，Ｘ市にあるＹ施設を利用する母親４名である．研究協力者の構成は，30歳代が３名，40歳代が１名の母子家庭４組である．

②データ収集・分析

2008年５月から９月の約４カ月に渡ってデータを収集した．データ収集方法は，半構造化面接とし，研究者１名が研究協力者全員の面接を行った．１名に参加者に１回の面接を実施し，面接時間は約１時間程度を目安として行った．すべての協力者に面接内容の同意を得た上でICレコーダーに録音し逐語録を作成した．半構造化インタビュー（semi-structured interview）による聞き取り終了後，インタビューの内容をもとに逐語録を作成し質的記述的内容分析を行った．

研究協力者全員の録音データから逐語録を作成

し，逐語録の意味内容を損なわない単位で分析単位として，前後の文脈を考慮しながらそれぞれの意味内容に応じてコードを作成した．研究協力者の語りを項目ごとに分け，サブカテゴリ化し，さらに大きく分類されるものをカテゴリ化するというように抽象度を上げて行った．分析は，主に親の変化を「親の育てなおし」に着目して分析を行った．

4．倫理的配慮

北海道医療大学看護福祉学部・看護福祉学研究科研究倫理委員会の承認を得た後，研究協力者に対して，研究の趣旨および研究への参加拒否や途中放棄が可能であること，調査を通して得られた情報が本研究以外の目的で使用されないこと等を文章と口頭で説明し，同意を得た．

本研究では，広汎性発達障害児の母親に対するインタビューから考察を行うため，倫理面への配慮から各事例を匿名で記述している．また，プライバシー保護の観点から，インタビューの内容に個人情報，または個人を特定できる可能性のある情報は排除した．

5．研究結果

Y施設の親支援の取り組み内容は，①親へのカウンセリングによるメンタルサポート，②自助グループの活用による親同士・親仲間によるコミュニケーション，③支援者と協働で子育てを行い，子どもにある障害特性に見合った養育の仕方を学ぶことである．特に③は支援者との信頼関係の形成が必須であり，子どもの特性に向き合うようになることを目指していた．対象者の家族状況であるが，母子家庭が4家庭である．母親の周囲からのサポートについては，全ての家庭でほとんどなかった．すなわち，障害児を抱える4人の母親達は，十分なサポートや周囲の理解が得られないままに単独で子育てをしていたことがわかった．幼児期に障害の診断を告知され，Y施設での療育支援を活用するようになっている．4名の母親たちは，毎日Y施設を利用し，子どもと一緒にY施設で，デイサービス，自助グループ，親のカウンセリングを受けて過ごしていることがわかった．仕事は，Y施設にて仕事をしながら，生活保護を受給していた．

分析の結果として，コード104項目，サブカテゴリ30項目，カテゴリ19項目が抽出されたものを，表1に施設利用前について記し，表2に施設利用後について記している．なお，カテゴリ［　］，サブカテゴリ≪　≫，コードを＜　＞で示している．本文中の“”は研究協力者が面接時に語った逐語記録からの引用である．今回は，(1)【施設利用による子どもへの変化】(2)【施設利用による母親の変化】に着目し分けて述べる．

表1　施設利用前について

	カテゴリ	サブカテゴリ
子どもと障害	子どもの将来を悲観	子どもの将来不安から死を考える
	子どもへの関わり方が難しい	子どもへの関わり方が難しい
		子どもが何をするかわからなくて不安
	早くから子どもの発達に疑問	早期から子どもの変化に気付いていた
	障害告知による安心感	障害は私のせいではない
		ショックでなかった
	障害と施設を受け入れられない気持ち	施設や障害に対する否認
	施設への不安感	施設の違和感
母親	家族サポートの欠如	親族の助けがない
	一人育児の辛さ	母親だけは育児が難しい
	親自身の育ちが子との関係に影響	親として上手く子どもと関われない

表2　施設利用後について

	カテゴリ	サブカテゴリ
子どもと障害	子どもの変化を認識	子どもの成長を感じるようになった
		子どもの変化に気付くようになった
		子どもが自信を持てるように見えた
	積極的に子どもへ関与	子どもとの時間を作るようになった
		子どもに上手く関わりたいと思うようになった
	社会に対して障害理解を訴える	障害を受け入れる環境調整
	施設は安心できる家族	施設というよりも村や大きな家族である
母親	気持ちのゆとりが生まれる	気持ちのゆとりができた
		自分の時間を作れるようになった
	難しかった子育て	子育てを簡単だと思っていた
	育児協力を要求しても良い安心感が芽生える	人の手を借りると安定して子どもと生活できることに気付いた
	自己理解の促進	自分のことを振り返り知ることで強くなれた
	社会に対する不安	施設から出ることの不安
		知らない人と話すことに不安がある
	親も育児を通して成長	親として子どもに何をするのか
		これまで教わったことを考え直すきっかけ
		支援を受けて自分が変化した
		やってみようと思えばできる

(1)【施設利用による子どもへの変化】

施設利用前には，子どもの障害が発覚したことで，≪障害は私のせいではない≫と知り［障害告知による安心感］を得ていた．一方で，［障害と施設を受け入れられない気持ち］や［施設への不安感］を示していた．その中で母親は≪子どもの将来不安から死を考える≫という思い詰め，［子どもの将来を悲観］する姿があった．これは，障害以外に≪子どもへの関わり方が難しい≫ことや＜子どもが何をするのか分からなくて不安だった＞という想いが強くなったことで［子どもの行動や気持ちが理解不能］に陥っていた．実は，母親達は，［早くから子どもの発達に疑問］を持っており，生活の中で俄かに周囲との違和感を抱いていることがわかった．しかし，その答えを見つけることは，社会生活の中で容易ではなかった．

施設利用後には，Y施設の療育や母親達との交流などコミュニケーションが良い影響として作用し子ども

に関する知識や情報を得ている．それ故，母親達からは主に≪子どもの成長を感じられるようになった≫など［子どもの変化を認識］する傾向が多く見られた．周囲の影響や母親の気持ちの変化によって［積極的に子どもへ関与］していこうとする行動変化が生まれていた．その背景には，後述するが母親自身にゆとりができたこと，環境に落ち着きが見られたことが要因の一つであろう．大きな変化としてもう一つは，障害について［社会に対して障害理解を訴える］という行動に移行している様子があった．これは，≪障害を受け入れる環境調整≫を求めており，その根底には早くから情報を知っておけば良かった，理解していれば良かったという後悔から，これからの人のためにという意識が働いていることがわかった．

⑵【施設利用による母親の変化】

施設利用前には，すべての母親達に≪親族の助けがない≫ことが分かり［家族のサポートの欠如］が発生していた．これは非常に深刻な問題であり，一筋縄ではいかない子どもを母親一人で見なければならなく，誰かに頼りたくても頼ることができないなどストレスフルな状態に置かれていることがわかった．≪もう一人いたら，困った時に楽なのにと思う≫ことから［一人育児の辛さ］を感じていたようであった．母親達からは，子育てが上手くいかないことについて［親自身の育ちが子との関係に影響］していると関係づけていることがわかった．

施設利用後には，≪子育てを簡単だと思っていた≫というようにこれまでの子育て意識が［難しかった子育て］と変容していた．さらに≪人の手を借りると安定して子どもと生活できることを理解≫から［育児協力を要求しても良い安心感が芽生える］ことが施設利用によって身につき，意識変化していたことがわかった．母親については，子どもへの関わり方を通して［自己理解の促進］が行われており，［気持ちのゆとりが生まれる］経験となっていた．それに伴い≪親として子どもに何をするのか≫というような［親も育児を通して成長］する姿が窺えていた．しかし，施設において様々なことを学んだことを，社会でも行いたいと感じていることがわかった．母親たちは，社会でも同様のことを望む一方で，十分に受け入れてもらえない不安から≪施設から出ることの不安≫を強く示し，これまでも不安であった社会に巡り巡って今も［社会に対する不安］を強く持っていることがわかった．

母親達は［施設は安心できる家族］と捉えており，全ての母親から，Ｙ施設については“Ｙ施設は村みたい”“温かい大きな家族に思える”という感触を抱いており，人との繋がりや安心できる存在を肯定していたことがわかった．

Ｙ施設の支援を受けて子どもへの「気づき」に変化が認められたことと，親自身の育ってきた環境などを振り返る経験に繋がっており，特に生活全般に対しての関与が窺えた．支援者と協同して子育てすることに，親は“子どもに対して可愛いと思うこと，愛することなど向き合えるようになれた”と気持ちのゆとりや子どもへの変化が挙げられていた．さらに，“他人や生活環境が大切である”ということも挙げられていた．

一方で，母親は，「親の育て直し」を受けることで，“これまで子育てができていなかった”“子育ては大変だ”と自分を認め直した所から支えられていることもわかってきた．

６．考察

Ｙ施設の親支援を「親の育て直し」という視点で見ると，まず親は，失敗を経験し，これまでの子育て体験を見つめ直しながらも，親として強く生きるため，子どもを育てるために奮起させる過程を描いているのではないかと考えられた．母親たちはこれまで十分に取り組めていなかった養育に気づく一方で，子どもの特性に向き合い，見本と考える対応方法を体験する（スタッフとの共同）ことで，改めて，子どもへの愛着を育み，養育を諦めずに取り組もうとする意欲を向上させていると思われる．母親たちは施設に対して，これほどまでに温かな居場所として考え，安心できる場所と捉えている．これは，母親たちが，実は家族という存在を求めていること，立ち戻りたいという気持ちが強くあるからではないだろうか．そのような意味でＹ施設における関わりというものは，現代家族にとって欠けつつある人とのつながりを感じることができるなどという，良い影響を及ぼしている側面があると言えよう．

この過程に生じる母親の気づきが，否定的な自己に向き合うなかで，母親の無力感や抑うつ感情あるいは反動としての子どもへの陰性感情が強化される可能性も伺える．また，欠落している力を授かったという母親の気持ちや，それまでの孤立無援感の養育状況に対して，施設は，指示的，教示的な関わりをすることで，施設への万能感を抱きやすいと思われる．すなわち母親の施設への依存傾向が形成される可能性も示唆された．これは母親が，子どもが巣立っても施設に関わっていたいという心境から推察できた．このような課題を内包しつつも，子どもの特性に向き合い，よりよい養育姿勢を形成していくことの有用さもあることから，今後，母親自身の主体的な関わりを育むために，施設の支援がいかに徐々に後退していくかを検討する必要があるように思われる．いずれにしても，親の育て直しという視点は，押しつけて行うものではなく，核家族化に伴った親と職員との信頼関係の樹立が根底にあってこその視点と考える．

引用文献

岩田美香（1996）「育児期の母親の育児不安とソーシャルサポート」『北海道大学教育学部紀要68，191-233.

牧野カツコ（1981）「乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞」『家庭教育究所紀要』3，56.

根来あゆみ・山下光・竹田契一（2004）「軽度発達障害児の主観的育てにくさ感―母親への質問紙調査による検討」『発達』97(25)，13-18.

下田茜（2006）「高機能自閉症の子どもを持つ母親の障害受容過程に関する研究―知的障害を伴う自閉症との比較検討―」『川崎医療福祉学会誌』15(2)，321-328.

受付：2011年11月30日
受理：2012年2月3日